

安倍能成

空疎なる主観

空疎なる主観

近頃文壇に現われる議論を見ると大分様子が變つてい
る。問題が自己ということの中身にややはいって来だし
た様に思われる。金子筑水ちくすい氏の如きは頻りに「自己を造
る」ということを説かれるし、又自己告白とか自己批評
とか、更に進んでは宗教的信念をいうものもある。十月
の新小説に恵美光山氏が、文壇が足場を更かえて樗牛氏梁
川氏の問題に歸つて来たといわれたのも、畢竟は自己の
問題に歸つて来たという意味に外ならぬと解せられる。
かくいえば自然主義の議論も亦また同じく自己の問題ではな

かつたかという人もあろうが、自分はそうは見ない。唯自己の問題に入る足場に過ぎなかつたと思う。そして今も尚、我々の主観は猛然として自己を肯定し主張する程には充実して居ないのが、少くとも自分の実状である。翻って文壇の評論を見ると、やっぱり此の充実を得ぬ空虚の感じが見える様に思う。我々自身の感じを以て他を律するのは失礼ではあるけれど、金子氏の議論等を読んでも、セオリーとしては尤^{もつと}もであつても、要求としてはまだ充実しない所があるかに見える。充実と真摯とを主張する人の声が、必しも其の人の充実と真摯とに居る

ことを示さぬのみならず、我々は動やもすれば、自己の不
 眞摯不充実を鞭撻べんたつする若々しき、謙遜なる、自ら高しと
 せざる消極的の眞摯をすら見難い。空虚なるものは一人
 自分ばかりでもない様である。

一般の思想界の傾向が主観的に向つたのは事実である
 うが、顧みて自己を主張しようとするれば、自己の主観の
 あまりに空疎に、あまりに貧寒に、あまりにすさみ、あ
 まりに力弱いことを感じて居るのが、今の比較的いつわり詐いつわり少
 ない人の實際経験ではあるまいか。論壇沈滞の大原因は
 ここにあると思う。そしてこれはやっぱり自然主義的思

想の結果であると思う。

自然主義の議論はもうすんだという人がある。しかし自分の考では自然主義の議論は自然主義自身で完結するものではないと思う（その理由は今ここに委くわしく述べる余裕がない）。しかし自然主義（文壇で唱えられた）という詞ことばほど漠然たるものはない。今ここではやっぱり漠然と唯近頃の自然主義的思想ということにして考えると、大体理想主義に対立したものであって、価値的判断よりは現実の真を重んずるといふ様な意味であつた。尤も価値的判断といふものが自然主義者によつて全然撤

去せられて居なかつたことは勿論である。唯彼等の大体の思想が価値即ち真という風でなかつた一事は明かである。

現実の真とは何であるか。これにも随分議論はあることと思うが、彼等の所謂現実の真が、科学者の冷頭や哲学者の沈思で、広く深く求められたのでない一事も亦明かである。現実の真といつても、時間の上にも空間の上にも、又種類の上からいつても、随分狭く限局せられた真であつた。その真とは物質的とか肉体的とか、官能的とか、具体的とか、刹那的せつなとかいう形容詞の附くべきも

のであつた。彼等が最もエンファシスをおいたのは、自分の唯今の経験ということであつた。即ちこの意味に於ては、彼等は疾くに主観的であつた。彼等はしきり頻に哲学や宗教を排斥したけれども、そのいう所の現実の真とは、決して科学的真理でなかつた。概していえば彼等の真の範囲は「我の唯今」で、その勢力も亦「我の唯今」であつた。無論その特色もここにあつた。岩野泡鳴氏の説が特色の著しかつたのもここにある。島村抱月氏の自然主義論が、此等の議論の中で最も理路の整つたものであつたに拘かからず、あまりに尤もらしく、あまりに博大にな

って特色の薄れたのは、島村氏が「我の唯今」を主張するには、学者癖が多過ぎたからであろう。

さて此等の論者には共通した「我の唯今」があった。それは前に挙げた形容詞で大体は覗うかがわれると思う。人間に動いて居る自然力という様なものが力説せられたのもその一例である。彼等は皆主観的ではあったが、その主観は主として感覺的、刹那的であつたことは蔽おおわれない事実である。だからその主観は到底持続して肯定し主張し得らるる主観ではない。受動的であり消極的であることは殆ど説明を要しないと思う。今はこうであるとい

い得るばかりで、固もとより未来も何も律し得られるものではない。

此頃の思潮の多少の動揺は、我々の到底かかる状態に満足し得ないことを示して居るには違いない。唯進んで動こうとすれば、忽たちまち自己の空疎に妨げられる。自己はまだ決して充実して居ない。思うに今迄よくいわれた「考える」とか「自己を静観する」とかいうことは、寧むしろこれから初まるべきものではあるまいか。自然主義時代は深き自己静観の余裕ある時代では決してなかつた。

(明治四十二年十一月二十四日)

日本文学電子図書館

空疎なる主観

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館